

サービスラーニングで学んだこと

社会福祉学部社会福祉学科 2年 中西 美恵子

活動先：NPO 法人 はっぴいわん大府

クラス：松下 典子 先生

はじめに

活動の取り組みを始める前までは、自分の目的というものは決まっていたが、人前に立つという立場において自分から動くことはなかった。しかし、この活動を通して、また、活動に対しての事前学習や他の活動先との情報・意見交換などを行うことで「自ら動く」ことが大切であることを知った。また、自分から積極的に動かなければ何も始まらないことが分かり、以前よりも積極的に行動をするようになった。

1. 自分の成長と気づき

この一年間サービスラーニングの活動をしてきて、地域の人たちと関わることで地域の問題解決を当事者と共に話し合い、学ぶことで「自分には何ができるのか？」を考えさせられた。そんな中で、私は大府市にある「はっぴいわん大府」で 6 日間活動をしてきた。最初は、利用者さんや職員さんたちと話して楽しめることができるのか不安だった。

はっぴいわん大府では、地域に住む高齢者を中心に生きがいをもって「ピンピンころりといけたらいいね」をモットーに楽しいたまり場をつくっている。また、子供からお年寄りまでの方が気楽に来れるように、つながりをつくっていけるように「いつ来てもいい、いつ帰ってもいい、もう一つの家」を目指している。

今回は自分たちで企画したことは実行できなかったが、代表者やボランティアとして働いているスタッフの方から話を聞く機会が多くあった。活動内容は、午前中に利用者さんや昼食を食べに来てくれる方のために、食事の準備や部屋の掃除をした。食事のお手伝いとして地域の方とふれあいながら料理のコツも教わることもできた。野菜も畑で収穫をしたものばかりなので健康によい食事がとれた。午後の活動では、利用者さんと毎月行われるボールペン画や絵画などの教室を見学させて頂き、今回は折り紙で箱を作ったり牛乳パックでカゴを作ったりして過ごした。利用者さんやボランティアの方々と触れ合う時間は限られていたが、料理を美味しく作れるコツや牛乳パックや折り紙での作品の作り方、そして、お互いに知ってもらうために自己紹介をしたりしてコミュニケーションをして時間を有効に使うことができた。

このことから、「はっぴいわん大府」では市民が運営する「もう一つの家」という居場所があることで、地域の人たちとの活性化をはかる活動として地域が大きな家族をつくっていることを学んだ。そこに集まる人たちの笑顔や楽しそうな様子を見て、ただ集まって話し、ご飯を食べるという身近で些細なことが大切であり、それが生きがいに繋がっていることに気が付くことができた。また自立した高齢者を増やすために、市民と交流するだけではなく、その中で自然とお互いに情報収集をして自分の考えを持つことが居場所であることを学んだ。そこから相手を思いやる気使いや困ったことがあれば利用者さんや家族同士など地域の住民での助け合いが生まれる。そういった日常の支え合いから地域に自立し

た高齢者が増えていくのである。そして、居場所という場は安心して暮らしていける街づくりであり、自己形成力を高める市民と協働していることを学んだ。この団体の理念である「いつ来てもいい、いつ帰ってもいい」という想いに対して、そこに集まる利用者さんや楽しそうにボランティアとして働いているスタッフさんの姿を見て、居場所という場の大切さや生きがいを実感することができた。

2. 活動を通して見えてきた地域活動や社会活動

6日間の活動を通して見えてきた社会課題がある。それは、現代社会ではほとんどの地域で高齢化が進み、サービスが満足に受けられないという状態になっている。このままだと介護保険も崩壊する危険性がある。そのためには、歩いて通える「居場所」として地域で集まる場が必要となる。町に自立した高齢者を増やすことや地域・住民同士がお互いに交流や支援、そして助け合うことが地域で必要になる。それが「居場所づくり」である。誰もが自由で自分を生かしながら過ごせる場所や交流をするというものが少なく、それぞれが孤立していると思う。なぜなら、一人で悩みを誰にも相談できずに抱え込み、鬱や家に引きこもってしまう人は少なくないからである。そんな時に、身近で気軽に立ち寄ることができる場所さえあれば、安心した住みよい町になる。また、社会の中で福祉に携わる人も増え、地域の福祉力も高まると思う。そのようなサービスへの気づきから、今は特別養護老人ホームなどの介護保険を利用する施設はたくさんあっても、はっぴいわん大府のような場所は少ないということを知った。今後、高齢化が進んでいくことが予想されているが、サービスも受けられない人も出てくる可能性もある。介護保険だけではなく、「はっぴいわん大府」独自の市民が創り出した事業だからこそできる地域貢献でありまちづくりである。今回は、その居場所という役割の存在の大切さについて知ることができた。

最後に

サービ斯拉ーニングを振り返ってみて「はっぴいわん大府」では、子供からお年寄りの方と一緒に楽しみたいというボランティアの方々からの想いがあることに気が付いた。しかし、実際はほとんどが高齢者の方が多く、若者にとってその活動自体に関心がない人が多いように感じる。なぜなら、若者と高齢者とのつながりは家族ぐらいしか付き合うという考えがないと思う。このことから若い人からの元気や勇気づけることで、お年寄りの方が笑顔になる。コミュニケーションも交わすことで相互に市民性を育み、生きがいや喜びとして共に分かち合える。また、地域や住民同士のつながりが希薄化していることから「居場所」が必要になり、その居場所をつくることで助け合いが生まれ、人と人が広く、深く付き合えるような温かい地域になり、信頼性を築くことができた。

これから地域の人に知ってもらうための広報、チラシを配りなど、私たちには「何ができるのか？」ということを考えて、活動を通して学んだことを生かし支援や問題対策を考え専門性にかさねて活かしていきたい。